

特別優秀賞

## 父のお土産

鹿児島県 喜界中学校 三年

小山 光

今回も父は嬉しそうに、私にお土産を手渡してくれた。五年前から単身赴任している父。会いに帰ってくるときには、いつも家族へのお土産を忘れない。最近の流行りに疎い私へのお土産は、今時な洋服。いつも丁寧にラッピングされている。私はそれを慎重に開き、中から新しい洋服を取り出す。ふわっと新しい匂いがする。きれいな袋は捨てずにとっておこう。

「サイズが合わなくても、お店に持っていけば大きいものと交換してくれるって、店員さんが言っていたよ。」

と父が言った。お土産に買ってくる服は、いつもその「店員さん」に選んでもらっているようだ。いつもすてきな服を選んでくれるなあ、と嬉しくなって急いで着替えた。父は、

「似合ってるね。サイズも大丈夫そうでよかった。お父さん、中学生の女の子の洋服、わからないから、その店員さんに写真を見せて、似合うものを選んでもらっているんだよ。」

と嬉しそうに笑った。

父の仕事はとても忙しい。家事と仕事を両立させながら、五年間も一人で頑張っている。離れ離れになったときに三才だった妹も、もう小学二年生だ。本当は家族みんなでいっしょに暮らせたなら最高だが、祖母を一人にするわけにはいかないので、現実には難しい。そんな父にとって、お土産を買うことは、ふだんいっしょにいられない私たちへの愛情表現なのだと思う。

「光は会ったことはないけれど、店員さんは光のことを知っているよ。」

と父は言っていた。離れて暮らしていることも知っているのだろうか。もしかしたら、店員さんは父の気持ちを理解してくれて、父が服を探すのを一生懸命に手伝ってくれているのかもしれない。丁寧なラッピングを見るだけで、店員さんの優しさが伝わってくる。店員さんから応援されているようで嬉しい気持ちになる。仕事だからというだけでなく、心が込められていると、知らない相手にまで思いが伝わるのだと実感した。

人は関わり合って生きている。人との関わりを明るく、楽しくするために「親切」は必要なのだ。「親切」とは、誰かのために心を込めることだと私は思う。心を込めれば自然と、自分が相手のために何ができるかを考えられる。一人ひとりが小さな気づかひができたなら、優しい世の中になるのではないだろうか。

私が生きているのは小さな社会だけれど、店員さんのように親切な人がたくさんいる。学校の先生方や友達、地域の方々など、多くの人たちに支えられて、私は今幸せな生活を送ることができているのだ。私にできることは周りの人に感謝すること、そして、自分のすべきことにも心を込めること。それが自然にできるようになりたい。将来社会に貢献できるような心の優しい大人になるために。

「小さな親切は、実は大きな親切なんですよ。」

担任の先生の言葉が心に響いた。